

紹介

O Daniel Mornet ; Les origines intellectuelles de la Révolution française. Paris,

1933.

最近物故せるフランスの有名な文學史家 M. G. Lanson の高弟である Sorbonne の Daniel Mornet 教授は十八世紀文學史家としては現代の權威であるが、教授がフランス大革命の智的根源に關する卅年間の研究の成果として發表せられたのが、浩瀚なる本書である。

「大革命の諸根源は一の歴史であり、大革命の歴史は別個のものである。」との信念のもとに「革命的思想の歴史でなくして、大革命の智的根源の歴史を書かん」とした著者にあつては、従つて大革命の經濟的・社會的・政治的原因は勿論、所謂當時の諸々の doctrines そのものも當面の研究課題ではなく、「大革命の準備に於ける intelle-

gence の役割を正確に追究すること」云ひ換ふれば、「第一流の écrivains のみならず、二流、三流の、乃至は、現在第十流位に思はれてゐる人々の思想、これらが單に智識的社會のみでなく、あらゆる職業に従事せる人々の輿論に如何なる影響を與へたか、又この影響はどのやうにして上層より下層へ、首都より地方へと波及して行つたか」等々を出来る限り正確に測定 (mesurer) せんとするのが著者の目的である。

この目的のために、書物の出版數、圖書館或は個人の書庫の目録、乃至は諸種の集會 (Société) の記録、新聞、教科書等に至るまでの、更に巴里のみならず地方都市にまで及ぶ、實に克明な文獻的資料蒐集が試みられた。かくて本書の背後には卅年にわたる茫大なる documentation があり、一五七六に達する bibliographies はこれを示すものに外ならぬ。

純粹に智的なる根源を研究せんとする教授は論議よりは行爲が支配的になる一七八七年以後には言及せず、一七一五年より一七八七年までを三期に分つて取扱つてゐる

る。

一七一五—一七四八 「最初の争闘」

一七四八—一七七〇(頃)「決定的闘争」

一七七〇—一七八七 「勝利の獲得」

これらの各時期に於ける教授の叙述過程は大體、先づ指導的な人々、例へば Voltaire, Montesquieu, Rousseau, Diderot 等について、次に一般の思想界乃至首都巴里に於ける *idée philosophique* の傳波の情況、更にこれを地方について考察し、新聞、教育方面にまで及び、最後に二、三の實例を示すことによつて論證を確實にせんとしてゐる。

かくて豊富なる文獻と綿密なる調査とによつて教授が達した結論にこそ、看過すべからざるものがある。確かに王(roi)である Voltaire, 師(maître)である Rousseau の及ぼした所は大なるものがあつた。……がしかし、あらゆる大膽な又矯激な主張は二流三流の écrivains によつて唱へられた。……*Montesquieu, Voltaire, Diderot, Rousseau* 等が何も書かなかつたなら、フランスの、又大革

命の將來はどうなつたであらうかと考へることは無益なことである。輿論の動きは單にその強烈さ、熱狂ぶり、又その速さを少しく減じたであらうが、大した相異のありえないことは確である。……」

純粹に思想史的方面よりした教授のこの結論は、他の社會的・經濟的考察よりの見解に著るしく近きものであり、從來甚大なる影響を意識的・無意識的に與へてゐた Taine 的謬見に一大修正を強制するに至つたのである。

だが病は症候を明にするのみでは、その原因は解らない。教授の研究も *idees philosophiques* の傳波情況の明示に止まつて、根源(*origines*)にまで達してはゐないのではないだらうか、との疑問は *Revue historique* の評者 M. G. Pégibet と共に懐くことは許されるであらう。

しかし、このことは本書が十八世紀思想史の研究上を持つ重要性を決して減ぜしめるものではない。壓迫せられたる諸々の思想が、當時の諸種の社會階級に、如何に浸潤して行つたかを知ることが、現在の我々にとつても決して興味の無いことではないだらう(Librairie Armand

Colin, In 8°, 548 pages, 60fr.) (前川貞次郎)

○内蒙古・長城地帯 乙種第一號

東亞考古學叢刊

現時支那本土に於ける考古學的調査の殆ど見る可きものゝないのに對して、これを繞る諸地域に於ては、我國を初め歐米の諸學者に據つて着々たる業績が收められ、これに關しては事新しく述べ立てる迄もないことである。此處に紹介せんとする調査報告書の如きはかゝる業績の上に、更に光輝を添へるものと稱しても過言ではない。即ち本書は水野精一・江上波夫兩學士が去る昭和五年内蒙古地方及び長城地帯を踏査し、其の地に於て親しく蒐集した諸資料に基いて研究した結果を發表されたもので、調査報告と稱するより寧ろ集成的研究と謂ふが當つて居る。

其の内容を見るに第一は蒙古石器時代の文化、第二は綏遠青銅器、第三は支那北疆に於ける繩蔴文土器遺蹟の三篇に分つて居る。第一篇に於ては先づ内蒙古錫林郭爾地方の新石器時代の遺跡に就いて記し、其の砂漠地帯で

あるところから、純粹なる包含層の發見は困難であるが多數の石器を獲た。此の石器は殆ど打製の細石器で、石材は多く碧玉・玉髓・瑪瑙等が用ひられ磨製品として砂岩から成る石棒・石皿・環石等がある。土器は其の存在僅少で種類も櫛目文のものを主とする。此等の出土品は此の地方に限らず、蒙古高原共通なものであるが、其の特色である細石器によつて、此の地の新石器時代の文化がアジア大陸の砂漠草原地帯に行はれた所謂 Microlithic Culture に屬することが明かである。而も最も親縁關係を有するのがロシア西比利亞地方の新石器時代である。然しそれと共に獨自の地方的特色を持つて居ることが窺はれる。又黃河流域の文化とも接觸のあつたことは一部共通の土器・石器を有することに據つて知られる。猶此處に注意すべきは蒙古高原に彩色土器の出土の缺けて居ること、この土器はその根源が西方に求められ而も彼地に於ては細石器に伴はれて居る場合が多い。此の點から、蒙古高原に於ては單に細石器のみを輸入し、これに反して黃河流域に於ては彩色土器のみを採用したことが推測される。